

Google マップ、すごい。



松本 政美*

いまさらながら、Google マップの面白さや可能性の大きさを感じている。

ストリートビューの対象地域に札幌市も入っていると知り、自宅周辺を見てまわったのはそう古いことではない。現在のデータは昨年夏に撮影されたらしく、ちょうどリフォーム工事中だった乱雑な我が家も丸見えで、窓から外をうかがう猫(ヨモギ、♀)まで写っている。面白いとは思ったものの、自宅周りや興味のある街を一通り見ればそれ以上の興味はなかった。その威力と可能性を知ったのは、東日本大震災がきっかけである。

3月11日当時北海道開発局職員だった私は、開発局の災害対策室の大画面で仙台平野が津波に飲み込まれていく信じがたい光景を呆然と見ていた。同時に、仙台がこれほどの被害なら、三陸沿岸の港町は壊滅ではないかと思っていた。

学生時代を仙台で過ごした。1年ほど多賀城市にも住んでいた。毎年新入生が入ると学生寮の行事で松島まで酒を飲みながら夜通し歩いた。陸前高田、釜石、大槌、石巻、気仙沼、東松島、女川、南三陸…。その後次第に深刻な被災状況が伝えられる町の名は、行ったことがあるか、そうでなくとも仙台で知りあった誰彼の出身地だった。

そのうちにGoogle マップで被災地の状況を見ることができるようになった。地図には被災前の市街、航空写真に切り替えると被災後に撮影されたがれきの原。町によってはストリートビューが使える。がれきの中の道路上をクリックすると被災前の街並みが立ち現れ、今は存在しない街を歩きまわられるのが異様な悲しさだった。35年前に住んでいた多賀城のアパートが今も変わらず存在することも確認できた。

それまで使ったことのなかったGogleEarthを使うようになると、津波被害と地形の関係がよりはっきりと理解できるようになった。これはいわゆる地球儀ソフトで、パソコンやスマートフォン上で航空写真や地形データ等を組み合わせて地球上のどこでも地形を立体表示できる。高度や視点も自由で、主要都市では建

物や橋梁などもデータ化され立体表示されるので、あたかも上空からヘリコプターで見下ろしているような実感が得られる。

比較的低空で福島第一原発上空から海岸線を北上し、青森まで移動してみると、被災の全貌が自分のスケール感覚で体感できたように思えた。また三陸の地形からくる従来の集落形成の必然性や、今後の復興計画の制約の厳しささえも理解できるように感じた。これは被災地の復興を考える上で重要なツールであるのみならず、今後の国土計画や土木技術の基盤となる技術ではないのか、というのがそのときの実感である。

地図も、航空写真も、国土数値情報もそれぞれに有用で、これまでも国土計画や基盤整備計画に活用されてきたのだが、各種の情報を総合して一つの地域像、国土像を描き、着想を得ることは、それなりの訓練やセンスを必要とする技術だと理解してきた。だが、Google マップの自宅の窓辺の猫から地球規模まで連続的にスケールを移動できる操作性のよさ、各種の情報を総合して現実に近い画像に再現する表現力は圧倒的で、これを日常的に使う若い世代の世界理解の水準は過去とレベルが違ってくるのではないか。地域計画や土木工学の世界ではより顕著に、誰もが、目の前のプロジェクトや構造物の意義や役割をグローバルな視点で直観的に理解し、説明できるようになるのではないか。また、土木構造物の大小を問わずマップ上で履歴を検索できるようになり、維持管理の効率化が図られるのはすぐにも実現しそうに思える。

「土木は地図に残る仕事」との矜持も、今後は大小ではなく「歴史的に長期間マップに残る仕事」となるような気がする。

ところで、仕事を横に置いても、Google マップはかなり使える。妻女山上空から眼下に川中島を望み、高度を下げつつ鞭声肅々千曲川を渡って長野、善光寺方面に移動すれば気分は上杉謙信。成都から簡体字に苦しみながらも綿竹、劍閣、漢中、五丈原をたどれば、あまりの地形の険阻さと長安(西安)の遠さに諸葛孔明の苦勞が偲ばれるのである。

(独)土木研究所 寒地土木研究所 監査役*